

1. Annual Meeting Program Committee (AMPC)で学んだこと

— 学会の構造に関する国際比較

山田 恵 京都府立医科大学大学院放射線診断治療学教室

2025年の国際磁気共鳴医学会 (ISMRM) は、気候の良い5月のハワイで開催された。この学会にプログラム委員長 (Program Chair: PC) としてかかわる機会があったことや、PCを引き受けた経緯やプログラム策定の概要と併せて2025年7月号にて紹介した¹⁾。今回はその続編として、プログラム委員会 (Annual Meeting Program Committee: AMPC) で学んだいくつかの概念を読者と共有してみた (図1)。

周知のとおり、日本の科学レベルの凋落は随所で報道されている²⁾。その原因は多元的とされ、例えば、研究費の額・配分、若手研究者の不安定なポジション、研究時間の減少、官僚的な社会制度、産学の溝、人材流動性の欠如、学閥の存在などが想定されるわけだが、その責任の一端は学会にもある可能性がある。このあたりは、これまであまり着目されてこなかった論点かもしれないが、本稿ではそこに焦点を当てた。特に、プレナリーの位

置づけやシンポジウムと一般演題の配置について、問題提起をしてみたい。

プレナリーの位置づけ

国際学会における重要な目玉の一つがプレナリー・セッションであるのは、前回も述べたとおりだ。全員が一堂に会することが期待されているため、会場の中で最も大きな部屋*1を使うだけではなく、その時間帯にはほかのプログラムを組まないのが一般的だ (図2)。欧米の学会には必ずと言ってよいほどプレナリーがあって、それにより学会の方向性、あるいは主催者側のメッセージが参加者と共有される。最近の放射線科関係の学会 (例えばRSNA*2) だと、人工知能 (AI) や燃え尽き症候群、そして人手不足などを取り上げることが多い。つまり、その時々学会員の間で問題となっている事柄を扱うわけだ。こういった場を利用して、学会員が共通する意識を持

つことが、後に強大な力となりうる。例えば、行政に対して何らかの要望を出すに際しても、学会員から同時多発的な声が届く方が圧倒的に効果的だ。こういったことを経験から学んでいる人たちにとっては、プレナリーというものは必要不可欠な存在なのだ。

ところが、意外に日本の学会ではプレナリーに類するセッションを見ることは少ない。仮に、「プレナリーの」な時間帯が設けられていたとしても、「分野の発展のために全員参加で視聴してほしい」という主催者側の強い意志は見えてこない場合が多い。プレナリーに類するものとして、文化講演が最も大きな会場に配置されることもあるが、演者は医療とはおおよそ無関係の作家であったり芸能人だったりする。すなわち、これらの催し物は、学会の息抜き、あるいは客寄せに位置づけられている。



図1 2025年1月にリスボンで開催されたAMPCの合宿の様子

初日夜の夕食後から始まるこのオリエンテーションで、筆者がプログラム策定の方針についてメンバーに説明している場面。ここに集まっている人たちの多くにいくつかの共通項があり、それは長旅で疲れていること、時差ボケと戦っていること、夕食後で満腹であること、そしてワインがすでに1、2杯は入っていることだ。にもかかわらず、参加者のテンションは一挙に最高潮に達しているかのように見える。何しろ全員がAMPCに参画できることを長年にわたって渴望してきた人たちだ。これから始まる3日間の濃密な時間へと向かう高揚感が写真から伝わってくる。撮影していただいた飯間麻美先生、ありがとうございます。

* 1 ハワイ国際会議場のKalakaua Ballroomは最大3464人を収容可能

* 2 Radiological Society of North America: 北米放射線学会